

佳作

「生かされている喜び」

本田 賢悟さん

「膵臓癌」それが三年前に私が告げられた病名でした。

私の健康管理は、不整脈と痛風治療のため、自宅近くの内科医院に長年にわたり通院していたことから、そこでの定期的な血液検査と年一回の会社指定病院での健康診断、定年退職後の、人間ドックでした。

しかし、一時の気の迷いか、退職して三年目の年は、体調も良いし、血液検査も変化が無かったことから、受診をしませんでした。

その後数カ月したところから、血糖値が高くなり始めたのです。人間ドックを受診しなかったことを後悔しました。

そんな時に、元同僚が再就職した病院から、人間ドックのパンフレットが郵送されてきました。

私は、前回の人間ドックで「描出不良」と診断された膵臓が気になったので、腫瘍マーカー検査をオプションしました。

その結果、腫瘍マーカーの数値が高いと指摘され、CTとMRIでの精密検査をしました。

検査では、膵体部に小さな腫瘍らしきものがあると診断され、専門医のいる大学病院を紹介されました。

大学病院での造影剤検査では、五人の医師や検査技師の人たちが集まり、映し出される映像を見つめていました。

「よくこんな小さいの、見つけたな」

医師たちが感心するくらい、私の腫瘍は成長を始めたばかりの小さなものでした。

その日から、手術までの二か月間はインターネットで、この病気について調べました。

生存率、完治情報をみても希望的なことは、何一つありません、しかし、私は不思議と落ち込みませんでした。

心のどこかで、この病気で死ぬことはないと思っていたのです。

手術室に向かう朝も、何の気負いもなく淡々としていた気がします。

妻や子供や孫に、心の中でお別れするという気持ちもありませんでした。

造影剤検査の時の「よく見つけたな」の医師の一言で、勇気づけられたのです。

発見困難な腫瘍を奇跡的に見つけていただいたのだから、絶対に治ると自分自身に言い聞かせたのです。

病名を告げられた時点で、多くの人が嘆き苦しみ、死を覚悟して落ち込むようですが、「よくこんな小さいの、見つけたな」のこの一言が、私に自信と勇気を与えてくれました。

更に、現役の頃に叩き込まれた、窮地に陥った時こそ「平常心」の教えが、私を冷静にさせたのかもしれない。

また、大学で学んだ心理学も自己暗示をかけるのに役立ちました。

幸いにして、術後の抗がん剤治療もこれといった副作用もなく、すみました。

診断確定日から三年が経ちます。

今でも、二カ月毎の通院と六カ月に一度の造影剤での検査は続いています、人間ドックで早期の発見をしていただき、早期治療をした私は、転移も再発もありません。

今は、十代の頃からの夢を叶えるために、日本橋から京都三条大橋を經由して大阪高麗橋までの、旧東海道五十七次を一人で歩き旅を続けています。

昨年からは、生かされた命を人のために役立てたいとの思いから、一人でも多くの人に結婚してもらいたい。支え合える伴侶がいる、明るい家庭を築いてもらいたいと思い、人と人との縁を結びつける仲人という仕事を始めました。

まだまだ、通院による定期観察は続きますが、主治医の指導に従い、完治に向かって頑張っていきたいと思います。

膀胱癌だって、早期発見、早期治療をすれば生存率だって上がるんだということを、私が証明したいとの思いから、今回はペンを取りました。

私が、今こうして治療が難しいといわれる病気に、臆することなく取り組めるのは、多くの医療関係者のおかげです。

勿論、一番私に勇気と希望を与えてくれたのは、私の病名を告げられた時も、手術の朝にも気丈に振舞っていた妻の存在でした。

子供たちも、私の前では明るく努めていた気がします。

生まれ変わった私は、前を向いて笑顔で歩いて行こうと決心しました。

「人間ドックは、私の命の恩人です」

今は、「生かされている」という喜びを実感しています。